

阿蘇くじゅう国立公園

概要

726 km²の面積を擁する阿蘇くじゅう国立公園は、大分、熊本の2県にまたがる九州の中央部に位置しています。火山により形成されたこの公園特有の地形および地理的自然環境から見事な文化が生まれています。祭りや収穫祈願など山の神に捧げられる儀式や活動などの伝統行事をこの公園の至る所で今も見ることができます。

阿蘇くじゅう国立公園は1934年に誕生しました。この公園の特徴は阿蘇山、阿蘇山を囲む巨大なカルデラ（火山の崩壊によって形成されたくぼ地）、火山の頂きが連なるくじゅう連山、さらにはこれら連山の山麓に位置する広大な台地を覆う草原です。

公園の南側には東西18km、南北25kmにわたる世界有数のカルデラが位置します。中央には平らなカルデラから起き上がった阿蘇山の5つの頂きがそびえています。これらは遠くから見ると、お釈迦様の涅槃像のようだとされています。活火山の中岳に隣接する最高峰高岳は海拔1592m、その中央部の火口は酸性の青い池で満たされ絶えず蒸気が上がっています。火口には徒歩、車、ロープウェイ（現在休止中）で近づくことができ、その峻厳な景観を間近で見ることができます。ほぼ完璧な円錐形をした米塚、広大な草原の草千里が浜、まるで別世界のように荒涼とした砂千里ヶ浜の光景、それらを取りまく高いカルデラの壁などもこの地域の見どころです。

この公園の中央に位置するくじゅう連山の景観は壮大で多様なものです。古代の火山活動による火山灰やがれきにより形成された海拔1791mの九州最高峰の中岳をはじめとする火山連峰から半田、長者原、久住高原までが今ではほぼ完全に草原に姿を変えていて、こうした景観のコントラストがくじゅう公園の名を知らしめています。この高原のタデ原湿原、坊ガツル湿原のどちらもラムサール条約湿地として認められており、珍しい植物や動物にあふれた比類ない生息地を作り上げた連峰の斜面に広がる湿原です。

公園の北に位置する鶴見岳は古代から霊山として敬われていました。他方、由布岳は有名な別府や湯布院の天然温泉の源です。鶴見岳の頂上には数多くの小さな仏像や神々の像、神社などが祭られており、徒歩かロープウェイを利用して行くことができます。快晴の日には別府湾、由布岳、久住連山のパノラマを見晴らすことができます。

この公園の生態系は大まかに 3 つに分類することができます。すなわち、火山性蒸気が立ち上る区域、山の麓に広がる森林、および人の手で管理されている草原です。高濃度の火山ガスが発生する区域ではほとんどの直物や動物は生き延びることができません。森林は原生林と古くからの草原地帯に木々が侵入してできた二次的な森林から形成されており、多種多様な植物や動物の生息地です。この公園の大部分を草原が占めています。こうした草原がこの公園を特徴づけており、牧草地や放牧地、かやの原、沼地などの自生の地域または半自然の地域と草や木が植樹された人工的な地域から成ります。草原は 600 種以上の植物や牧畜業および農耕産業（現地の人々の特定のニーズに合わせているため）を支えると共に非常に貴重な水源となっています。この水源は九州の貯水池として知られ、火山台地は雨水をためる自然の地下水タンクとなり、清浄でミネラル分の豊富な水を産出し九州の 500 万人の人々に水を供給しています。

春には草原は野焼きとして知られる野火で人工的に燃やされます。この野焼きは灌木や木が草原に侵入するのを防ぐために行われており、このようにして草原の豊かな自然生息地を保全します。このような人の手が入らないと、草地は森林へと姿を変えこの土地の多様性は失われることでしょう。

阿蘇くじゅう国立公園では、典型的な日本の火山景観のコントラストが見られます。深い森や険しい山々、草木の生い茂った湿地帯、隠れた温泉、清らかな湧き水などが見られると共に、一年を通じ、息をのむほどの美しい景色と豊富な草花に出会えます。